

阿蘇草原再生協議会の取組



再生 目標

草原の恵みを持続的に活かせる仕組みを現代に合わせて創り出し、
かけがえのない阿蘇の草原を未来に引き継ぐことを目指す。

地域内外から集う多様な構成員

阿蘇の草原（野草地）は周囲100kmにも及ぶ世界最大級のカルデラ地形の内外に広がっており、野焼き、採草、放牧という地域の生業とともに維持されてきたものです。雄大な景観とともに、多様な動植物が生息・生育する豊かな草原環境が守られてきました。

しかし社会経済状況等の変化から、人の手によって維持されてきた野草地が減少しています。それに対し現在では、地域内外の様々な団体や個人、学識研究者、行政・関係機関が草原の保全に関連する取り組みを開始しており、平成17年に環境省九州地方環境事務所が事務局として、「阿蘇草原再生協議会」が設立されました。

協議会設立されてから、野焼き・輪地切り支援ボランティア活動や、募金活動、草原環境学習の推進など、多様な実施主体による様々な活動が実施されています。

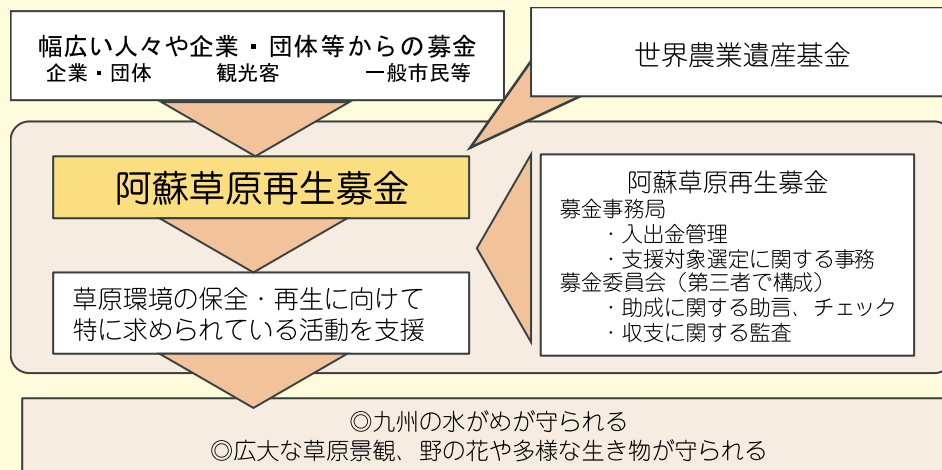
「草原再生」という 本地域の第一目的を担う協議会

平成25年、熊本県と阿蘇地域市町村のそれぞれから、草原再生に関する計画が策定されました。また、同年に阿蘇地域が世界農業遺産に認定されるなど、目的を同じ方向に持つ各主体の取り組みが活発化してきています。その中で、阿蘇草原再生協議会は法律に基づく協議会ということで、地域の様々な活動を行う団体との情報共有、連携調整、活動の振り返りなど、地域の中心的な役割を担っています。

募金による活動の推進

阿蘇草原再生協議会の下部組織には、募金事務局があるほか、募金の使途や支援内容について意見する第三者委員会である募金委員会もあり、阿蘇の活動原資は、実に多様です。

地元の銀行では、地元産業を守りたいという意志から、世界農業遺産基金を設立しており、そこからの協力金があります。また、九州一円の企業、自治体などが参加する阿蘇草原再生千年委員会があります。



阿蘇の草原の維持には、野焼き・輪地切り、干し草刈り、草小積み（干し草を束にして積み上げたもの）などは、草を資源として飼料や肥料として使うために生まれた地域の文化です。この草原では、伝統的に「あか牛」と呼ばれる阿蘇地域で多くみられる牛が飼養されていました。ところが、その飼養頭数は様々な社会的変化の影響を受けて、減少の一途をたどりました。そこで、草原再生や維持のために、2011年から畜産農家の方々に繁殖用あか牛（母牛）を導入してもらうための助成を始めました。

募金による成果を数値化し、支援先に公表

①放牧・採草利用への貢献

平成30年度の活動結果報告による採草利用面積は174.5ha。阿蘇地域世界農業遺産推進協会と草原再生オペレーター組合の連携による採草活動の面積が拡大しており、大きく貢献しています。

②維持管理面での貢献

平成30年度は、新たに構成員として2牧野組合が加入しました。これにより、協議会構成員の牧野組合により守られている草原面積は16,389haで、阿蘇郡市内の牧野総面積21,797haの75.2%に達します。また、野焼き面積は12,138haで、阿蘇郡市内全体の野焼き面積16,192haの75.0%に当たります。

③支援ボランティア等の活躍

ボランティア参加数は、平成29年度の2,617人から増加し、延べ2,834人のボランティアが野焼き・輪地切り等の維持管理作業で活躍しました。このうち阿蘇グリーンストックによるボランティア派遣人数は延べ2,764人です。